慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	フンボルトの歴史的理念説：その歴史記述家の任務についてを讀んで
Sub Title	
Author	船田, 三郎(Funada, Saburo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1933
Jtitle	史学 Vol.11, No.4 (1933. 2) ,p.1(507)- 17(523)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19330200-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

フンボルトの歴史的理念説

——その歴史記述家の任務についてを讀んで——

船田三郎

こゝに述べようとするものは主としてウィルヘルム、フォン、フンボルト（Wilhelm von Humboldt, 1767—1835）の「歴史記述家の任務に就いて」と云ふ一小論文の内容であるが、この論文は今日でもそうである通り、當時と雖も決して多くの讀者を有したものではなかつた。このことは史家ゲルヴィヌスの、この「小著を讀むもの頗る少く、これを理解するものの如きに至つては、なほ一層少かつた」との言に徴して明かである。しかしこれを理解したる專門史家には、多大の感銘と影響とを與へずにはおかなかつたものの樣に見える。何となれば上記のゲルヴィヌスの如きは、「歴史の本質に就いて、歴史記述の種類について、又史家の仕事と方法とについて吾人を滿足せしむるに足る程、初めて之を論じたるものは吾人の間にあつては唯フンボルトあるのみ」と言ひ、かくて彼は彼を稱揚して「優秀なる」史論家となし、

以てその說を支持したるのみならず、又かの史家ドロイゼンの如きは、彼を以て史學のベーコンに擬して居る程であるからである。更にランケの歷史記述は人をしてフンボルトの理論の實際化なりと判斷するを得ざらしむる程、彼此相酷似する點の鮮少ならざる所より見て、彼の史觀のランケに及ぼせる影響を全然不問に附することは出來ない樣であるからである。かくの如くフンボルトの史觀は當時にあつては專門史家に多大の影響を與へたものであるが、しかし彼れが前揭の論文を發表してより此方、既に百年以上を經過せる今日、振り返つて現代史學の見地より之を考察すれば、無論首肯し難き點、反對せざるを得ざる箇所は決して少くはないであらう。殊に彼れがその史論に形而上學的要素を織り込めるが如きは、飽く迄も經驗的たることを要求する史家の反對する所であらう。又彼れが形態を重んじ、歷史を以て一種の藝術と見做せるが如き――これは無論彼れが特に歷史の記述、表現の方面に觀點を置いて之を論じたるが爲めであるに相違ないが――歷史の學的性質を强調し、これより藝術的分子を驅除せんとする專門史家にとつては到底首肯し得ざる所であらう。しかしこゝで當面の問題とする所は、現代の立場より之を批評せんとするにあるのではない。却つて唯歷史的興味より、彼の史論は如何なるものであり、それが又如何なる要素より成つて居るものであるかを理解せんとするにあるのみで、唯この方面より之を考察するに過ぎないのである。

これだけを前置きとして、これからこの論文の內容に入らう。

彼はこの論文をギョーテに贈る時、これに副へて次の様に書き送つた。「シルレルの一語は常に余の忘れ得ざる所にして、この論文を書くに際しても屢余の念頭に浮びたるものなり。即ち彼曾て云へり、世人は余の歴史に關する論文を見て餘りに詩的なりと云ふ。しかも歴史記述家は詩人の如くなさゞるべからずと。當時この語余には逆説的(パラドックス)の如く見え、爲に余の理解に苦しむ所なりき。この論文は主として余の漸次これを理解せんとする努力に成れるものなり」と。この言によつて該の論文成立の由來は明白であるが、同時に又これによつてその内容も自ら察知することが出來る。彼はその論題をも歴史記述家の任務となして歴史研究家のとなさざるが如き、又その劈頭に於てこの記述家の任務は出來事の表現にありと規定したるが如き、皆その後に云はんとする所を暗にあらはして居るものと見ることが出來る。故にこの論文に對して公平を缺かざらんが爲めには、之を研究の方面より觀ず、却つて之を表現の方面より觀察せねばならぬ。勿論彼は決して研究の方面を無視するものではない。しかしその主とする所はやはり表現に存するものと云はねばならぬ。

さて歴史上の出來事なるものはそのまゝで表現の對象となる程、完全に現はれて居るものではない。若しそうだとすれば史家はこの出來事に對して全然所動的態度を取り得るであらう。しかし彼の云ふ所によれば出來事の感性界に於て見らるゝものは只その一部分のみである。換言すれば現象としてあらは

る、出來事は詮ずる所斷片的たることを免れない。この斷片的なるものを結合し、かくて全體に形態を附與するものは直接的觀察の對象とはならない。直接的觀察によつて知覺し得るものは唯互に同伴し繼續する事情のみであつて、內的因果關聯そのものは吾人の知覺し得る所ではない。しかもこの內的因果關聯にこそ歷史の內的眞理が存するのである。彼はこゝに歷史の內的眞理と云ひ、又他の處に於いてその生ける眞理と云つてゐるのであるが、それは結局現象界に於ては分離散在せる史實を因果關聯によつて結合し、之を全體として把握する所に存する。彼から見れば個々の史實は歷史に缺くべからざる基礎であり、その材料ではあるが、それは決して歷史そのものではない。彼にあつては眞正なる歷史と出來事の眞理とは同一義であるが、それは上に擧げた知覺し得ざる、或は現象となつて現はれざる部分を附加し、これによつて知覺し得る部分を結合し、かくて之を全體たらしむる所に存する。換言すれば如何なる個々の出來事でもこれを全體の部分として現はす所に、或はこれに歷史と云ふ形式を附與する所に出來事の眞は存する。而してこの全體の把握、その表現、これ實に歷史記述家の名に價する史家のなさゞるべからざる任務である。勿論彼は個々の出來事の精確なる研究を輕視するものではない、彼は歷史の眞理に接近せんが爲めには、二つの道が拓かれねばならぬと云つて居るが、その一は精確にして公平なる批評的研究である。彼は云ふ。史家にして若しこの研究を等閑に附せんか、詳細の點に於て誤謬を犯すの恐れありと。しかし彼の一層重要視する所は第二の道、卽ちかゝる研究によつて得らるゝ事實の

結合である。換言すればかの第一の手段たる史實の批評的研究によつては到底到達し得ざる、かの全體を豫感することである。彼は云ふ。若し史家にして唯第一の道を辿るに止らば、眞理そのものゝ本體を逸すと。ランケは特殊と共に常に普遍に着眼すべきことを力說したと云ふことであるが、フンボルトもこの點に於て、彼と異なる所はない。しかしこのことは單に歷史記述家に限らるべきことではない。それは又歷史研究家――一般に精神科學者にでもあるが――に對しても妥當である。何となればすべて歷史的なるもの、精神的なるものは、相關聯せる全體の一部として初めて眞に理解せらるゝからである。このことを明かにせんが爲めに卑近な例をこゝに擧げよう。例へば吾人は單語についてその持つ種々なる意味を詳細に知悉したとする。しかも單に個々の單語の知識のみにては未だ文章の意味を理解することは出來ない。何者文章そのものの意味は個々の單語の何れにも存しないからである。しかもそれ等が相關聯して全體をなす所に文章としての意義が認らるゝ。而して一旦この意義が把握せられんか、こゝに初めてその部分たる單語の精確なる意味も了解せられ、又例へば文章に脫語ある時、この全體の意義よりして之を補塡することも可能である。すべて歷史的なるものも亦かくの如く、その理解に必要缺くべからざるものは全體に關する知識である。何者これによつて個々の出來事の確實性も認識せらるゝからである。故にそれは歷史の記述に於てのみならず、又歷史の研究に於ても必要である。彼は云ふ。「すべて出來事の形式を獲得することによつて、探究せらるべき素材は一層よく理解せられ、單なる悟性の

作用によつて認識し得る以上に一層多くのことが、この素材に於て認識せらる」と。(こゝに彼は形式と云ひ、素材と云ふ。これは正しく當時の哲學、殊にカントの哲學の彼に及ぼせる影響によるものと見做すべきであるが、結局それは彼にとつては全體と部分、或は普遍と特殊の對立を意味するものに外ならない。)

然らばこの全體、卽ち彼の所謂出來事の眞理は如何にして把握せらるゝか。直接知覺の對象たる出來事は、上にも述べた通り、不完全にして斷片的なるが故に、之を全體たらしめんが爲めには、それ等は現象界に現はれざる部分によつて補足せられ、結合せられねばならぬ。この方面より觀て彼は史家を以て能動的、否創造的なりとし、又この點よりして史家は詩人の如く想像力によらざるべからずとなす。かくの如く彼は史家に比するに詩人を以てするが、しかし彼は無論この兩者を全然同一視するものではない。何者彼によれば詩人は事實に拘束せらるゝを要せず、全然純粹想像に賴ることが出來るが、史家はこれを現實そのものゝ研究に從屬せしめねばならぬからである。されば彼の史家を創造的となすは、その存在せざるものを作り出すが故にはあらず、單なる感受性を以てしては、實際ある通りに知覺し得ざるものを己れの力によつて構成するが爲めである。かくの如く觀て彼は史家の構成力を想像と云はず、むしろこれを豫感の能力、結合の才能と呼ぶをよしとするのであるが、然らばこの豫感の能力によつて得らるべきものは何であるか。それは先に言ひ觸れた彼の所謂內的因果關聯そのものである。然らば更

に問ふ。その概念の意味如何。この問題に解答を與ふることはフンボルトの場合に於ては特に肝要なりと云はねばならぬ。何となれば彼の史論の中核をなす所謂理念なるものも、實にこれと密接なる關係を有するものであるからである。

それ故先づこゝに問ふべきは所謂因果關聯なるものの意味如何であるが、それは決して一義的に解釋せらるべき概念ではない。之を實證論的、科學的に解すれば、この因果關聯は、現象の領域内に限らるべきものである。即ちある出來事の原因と云へば、この出來事と必然的關係を有する先行現象を指して云ひ、結果とはこれと必然的關係を有して時間上後に現はるゝ現象を云ふ。故にこの場合因果關聯とは時間上相前後する現象と現象との必然的關係を示すに過ぎない。しかしこれが唯一の因果關聯ではない。すべて現象とは或るものゝ現象である。それ故現象は、その根柢にこれを惹起する力の存することを豫想する。この力が原因であり、而して現象は皆その結果である。かの實證論的意味に於ける原因は、結果と同じく現象であるが、この力は一切の現象の原因なるが故に、現象として示現せざるもの、故に形而上學的原因と云ふべきものである。フンボルトの因果關聯なるものはかくの如き形而上學的原因としての力とその現象との關係を指して云ふものなることは言を俟たない。彼は「世界史の動因に關する考察」と云ふ未完の論文中に於て「後起する出來事の生じ來る先き立つ出來事を擧げやうとするにあらず、この兩者を生ぜしむる力を云々」と云へる所を見ても以上のことは明かである。彼はかくの如く現象界と

その彼岸に存する實在界とを認むるものであるが、かゝる二元的解釋は畢竟カントの彼に及ぼせる影響に因由するものと見ねばならぬ。何となればカント哲學も感性界と叡知界、現象界と實在界の二元觀に基くものであるからである。それは兎に角彼はかくの如き形而上學的原因、或は彼の所謂能動的創造的力の存在を確信し、史家に求むるにその把握を以てしたのである。彼は云ふ。若し史家にしてこれによらば、恰も迷宮の如き世界史の出來事に歷史の形態を與ふるを得べく、然らずして若し出來事の個々の事情を、そが外部にあらはるる通り排列するのみならば、その描く所は要するに畫家の鳥羽繪と異なる所がないであらうと。彼より見れば史家は出來事をそれがある通り忠實に表現すべきものと云ふことは無論眞である。しかしそれがある通り忠實にとの句は現象界に散在する出來事をそのまゝと云ふことではない。若し單に表面的現象に止まるならばその知る所は未だ半ばを出でない、强てこれを結合せんとすれば却つて之を曲歪する。歷史の表現を眞ならしめんが爲めには深く出來事の根柢をさぐり、そのよつて生ずる原因を究め、かくて內部よりしてその關聯を明かにせねばならぬ。この點に於て彼は歷史の表現を藝術の表現に比し、この兩者を以てその本質に於て同一なるもの、卽ち共に等しく自然の模倣なりとする。但し彼によれば模倣に二樣あり。一は眼と手のなし得る限り精密に外部の輪廓を模するもの、他はこれに反し、この外部の輪廓が全體の形式より如何にして成立し來るかの方法を豫め研究し、かくて內部より之を模倣するものであるが、彼はこの內、第二の方法によつて初めて眞の藝術的表現が可能

なりとする。藝術家は必ずしも外部にあらはるゝ自然を文字通り忠實に模寫するを要しない。藝術の基礎は眞形態の認識に存する。必然的なるものを探出し、偶然的なるものは之を捨離する所に存する。かくして初めて現象界に於ては朦朧たる、形態の內的眞理を啓示することが出來る。藝術の表現は自然の外形に拘泥せず、その內部に於ける純粹形式に着眼するを要する。彼はこの純粹形式を理念と云ふ。故に藝術家の模倣は理念よりせねばならぬ。只これによつてのみ形態の眞は藝術家に顯るとは又彼の云ふ所である。然るに歷史の表現は上に述べた樣に藝術の表現とその本質を異にするものにあらずとすれば、史家も亦理念より出發せねばならぬ。然らば歷史の理念とは如何なるものであるか。それは彼にとつては先きに擧げた形而上學的原因、現象の根柢に存する創造力であることは云ふ迄もない。彼は「歷史記述家が一切の出來事の關聯形式に關しその一般的形像を作り得るは世界史の創造力の研究による。而してこの領域に、上に述べたる理念は存す」と云へる所を見てもこのことは明瞭である。

彼はこの理念を當時の理想主義の哲學より得たるものであることは云ふ迄もないが、しかしこの理念は今述べた所によつて明かなるが如く、カントの意味での理念ではなかつた。卽ちそれは歷史の進み行くべき目標ではない。或はその方向を統御する所謂統制的原理ではなくして、むしろカントの後繼者が規定した樣にそれは形而上學的原理であり、現象の根柢に存する實在であつた。それは彼によれば「歷史そのものゝ本質をなす」ものであつた。それ故彼から見れば歷史を理解せんとするものはこの理念に

よらねばならぬ。彼は云ふ。「歴史記述家は理念に指導せられざるべからず」と。かくの如く彼は形而上學的理念より歴史を解釋せんとするものであるが、これは實は、歴史を單に機械的に、或は生理學的に、或は又これを單に心理學的に説明するものに滿足し得ざりしことを示すものと云はねばならぬ、勿論之を單に現象界に限つて觀察すれば、如何なる出來事でも、それはこれに先き立つ出來事を原因として生じ來るもの、從つてその性質はこの原因の性質によつて定まるものであらう。かの一見自由の如く見ゆる個人の意志と云ふが如きもその生前の、或はその屬する國民の成立し來る以前の事情によつて已に定まつて居るものであらう。それ故若しこの事情にして判明すれば未來の出來事も豫測することが出來るに相違ない。かの一見偶然的なる出來事の如く見ゆる結婚、死亡、犯罪と云ふが如きものも、比較的長年月間に亙れば規則正しき變化をなすものなることは統計の示す通りである。かくの如く觀れば、人間の自由行爲と云ふが如きも自然界に於ける出來事と同じく普遍的法則に從つて幾度にても反覆し來る樣に見える。歴史に法則を求めんとする學者はかくの如き機械的説明をなす。かゝる學者より見れば歴史は云はゞ不變的法則に從ひ、機械的にはたらく力に動かさるゝ時計細工に過ぎない。又これを生理學的に説明するものは次の樣に云ふ。個人にしても民族にしても、或は人類にしても、又その精神の顯現たる文學、藝術、風習乃至は社會の制度、法律と云ふが如きものにしても、すべて生理的作用をなすものに於ては皆その性狀と發展とその法則とが共通である。即ちそれ等が漸次に發展し來り、かくてその頂

點に達すれば、更に漸次に衰頽に向ふものなること、恰も個人の生命が生理的に次第に力を增加し、而してその極に到れば、爾後又次第に老衰に向ひ、かくて遂に死滅すると異なる所なしと。なる程歷史上の變化はその通りであらう。然しながら彼によれば機械的說明も、生理學的說明も、共に歷史に於ける一定不變の形式を究めんとするのみにして、かかる形式を取らしむる、その根柢に存する原動力を顧みない。更に又歷史を心理學的に說明せんとするものは、すべて出來事の說明の根據を個人の精神能力に求める。卽ち彼等はこれを以て行爲の動機と見、又この行爲より生ずる出來事の直接的原因なりとするのであるが、かゝる說明は類推によつてのみ可能であり、而して類推の可能は自他の間に類似點の存することを豫想する。然しながら個人にはその個人に特有なる所謂個性なるものが存する。かゝる個性は決して「多數の人より得、而して多數の人に適合するが如き經驗によつて判斷し得るものではない」。然らばかゝる個性は那邊にその根據を有するか。心理學的說明はこの問題に觸れない。しかしこの問題が解決せられざる間は歷史の眞を把握することは不可能である。之を要するに以上三種の說明は直接的に出來事にあらはるゝ力を原動力として之より歷史を說明するものであるが、しかし彼によればかゝる力よりも一層强くはたらき、而してそれ等の力に刺戟を與へ、かくてその方向を定むる、云はゞ原動力の原動力とも稱すべきものが存する。これが先きに擧げた彼の所謂理念である。かくの如くこの理念は一切の力の根柢にあつてこれを働かしむる力なるが故に、無論それは現實界に直接に現はれ來ることなく、

むしろその性質上、有限界の彼岸に存するものである。しかも「この理念は世界史のあらゆる部分を支配するものなるが故に、史家は出來事の眞の形態を認識せんが爲めには、必ず現實以上に出でねばならぬ」と。

彼は歴史現象なるものは單にその現象の領域内に止まる限りは、決して理解し得るものにあらざることを信じた。彼は歴史の過程が一定の方向を取つて進み行くとすれば、かゝる方向を取らしむる、云はゞ最初の火花の存すべきことを信じた。又かゝる方向をその行くまゝになしおかば、必ず行くべき所に行かざるべからざる筈なるに俄に方向轉換をなすことがある。かゝる方向轉換は自然法に從つて働く力に由るにあらず、必ず自由に働く力によらざるべからざることを信じた。彼は歴史現象中には唯必然的法則にのみよつては説明し得ざる偶然的なるものゝ現はるゝことを信じた。こゝに偶然的とは何等の原因なくして生じ來ることを意味するにあらず、自由に働く原因によつて生ずることを云ふのである。而してこの最初の火花たり、自由に働く原因たるものは彼の所謂理念である。それ故現象はその範圍内に止まる間は未だ理解せらるゝものではない。彼は云ふ。「現象の領域は唯この領域以外の一點よりのみ理解せられ得るのみ」と。彼は因果必然の世界以外に自由の世界を、現實界以外に理念の世界を、感性界以外に叡知の世界を認め、而して前者のしかあるは後者によるものなることを信じた。何故に現實世界はそがある通りに存するか。何故に感性界は因果必然の法則に支配せらるゝか。そはこれをしてしかあ

らしむるものの存在を豫想せずしては到底理解することは出來ない。彼は云ふ「世界の主宰と云ふことなくんば世界史は理解せらるべくもあらず」と。

彼はかくの如く世界史の道程は神意に指揮せらるゝものなることを信じた。然らば神は如何なる目的を實現せんとして世界史をそがある如くあらしむるか。この問題は史家の答へ得る所ではない。何となれば「世界主宰の意匠を直接に探究する機關は史家に附與せられては居ない」からである。然るに若し强てこれを揣摩し、任意の目的を立てゝ世界史を考察せんか、史家の自由研究はこれによつて拘束せられざるを得ない。彼は理想主義の哲學に影響せらるる所大なるに拘はらず、この點に於ては極力その目的論的歷史觀に反對せざるを得なかつた。彼によれば歷史哲學なるものは人間なり自然なりの本質より演繹して世界の過程はしかく〳〵ならざるべからずと初めより假定し、かくて世界史にその終局目的を指定する。しかしかくては史家の見解の自由の束縛せらるゝことは必然である。故に目的論的歷史によつては生ける歷史の眞は到底これを把握することは出來ない。彼が理念から目的と云ふ概念を排斥して、これを單に力の概念と見たるもその爲めであつた。彼にとつては理念は歷史によつて實現せらるべき目的にあらず、歷史を動かす力であつた。彼が「世界史の動因に關する考察」を世界史の哲學と云はず、却つてその物理(フィージック)と云へるもそれが爲めであつた。何となれば彼にとつては世界史の哲學とは要するに目的論的歷史に外ならなかつたからである。勿論彼は世界史の動因の研究は結局その目的如何の問題に歸

着すべきものなることを信じた。しかも目的を初めにかゝぐることは如上の理由によつて、彼の敢てなし得る所ではなかつた。彼は世界史を指揮する神意の存在することは之を信じた。この點に於て彼は理想主義の哲學者等とその見解を一にするものと云ふべきである。しかも彼は神意の直接に窺知すべからざるを、從つて世界史の目的を云爲すべからざるを主張する點に於ては、むしろランケとその立場を共にするものと云はれねばならぬ。

彼の所謂理念は目的概念ではない。それは力の概念である。それは先きにも云つた通り、原動力の原動力である。しかしこれは彼によれば任意の假定ではない。歴史そのものゝ本質である。然らばかゝる理念は如何にして認識せらるゝか。そは有限界以外に存するものなるが故に、現象界に於ける事物のしかるが如く、直接に知覺し得るものではない。しかもそれは知覺し得る對象にかゝるが故に、これによつてこの理念を感得することが出來る。誰か他人の精神は之を知り得ずと云ふか。無論そは身體の知覺せらるゝが如く、直接的に知覺することは出來ない。しかもそはこの身體によつて、之を通して知らるゝではないか。理念も亦然り。歴史の出來事は皆この理念のはたらきを示す。卽ち歴史に於ける大なる傾向と、周圍の事情より說明し得ざる力の生産とは實にこの理念の働きなりと云はねばならぬ、彼は云ふ。「理念は二樣の方法であらはる。一には方向(リヒトンゲ)として、二には力の生産として」と。ランケは指導的理念を解して各世紀に於いて之を支配する傾向なりとしたのであるが、そはフンボルトのこれを方向と

解したると異なる所はない。何となれば彼の所謂方向とは、ランケに於けると同じく時代を支配する大勢を意味するものに外ならなかつたからである。されば理念の働きは「眞正なる史眼を以て歴史を」考察するものゝ心には必ず生じ來るものである。歴史は單に物質の力や、自然の力によつてのみ支配せらるゝものではない。理念は又之を支配する。彼は云ふ。「故に史家は一切を唯、物質に求めて理念の支配をその敍述より排斥すべからず」と。

彼の最も重せしものは歴史の生ける眞理であり、出來事そのものゝ表現である。歴史記述の目的はこゝに存する。この點に於いて歴史は哲學と異なり、藝術と同じでない。哲學の求むる所は事物の第一原理であり、藝術の得んとするものは美の理想である。然るに歴史の目的とする所は現實そのものゝ表現に存する。勿論藝術と歴史とは、先きに述べた通り、自然の模倣であり、その表現たる點に於て同じである。しかし藝術の目的は美そのものに存するが故に、現實に拘泥するを要しない、むしろこれを超脱せねばならぬ。歴史はこれに反して現實を離るゝことが出來ない、否これに愛惜の情をよせ、人類運命の姿を誠實に、あるが儘に、表現せねばならぬ。ランケは歴史の客觀性を重んずるの餘り、己れの自我を滅却せんことを希つたと云ふことである。これは固より不可能事ではあるが、しかも歴史記述はこれを看るものゝ心に、恰も史家の意見も感情も要求も全然消え失せたるが如く感ぜしむるを以て理想とせねばならぬ。彼は Sinn für die Wirklichkeit と云ふことを非常に重んじ、而してこれを人心に喚起せ

しめ、活潑ならしむるを以て歴史記述家の任務なりとして居るのである。彼にとつては歴史の目的は實用に存するのではない。彼は云ふ。「歴史は模範とし、鑑戒とすべき實例を擧ぐるによつて役立つにあらず。かくの如きは邪路に導くこと多く、敎へること稀なり」と。これに依つても彼が啓蒙時代の實用主義的歴史に反對したることが明白である。かくの如く實用主義に反對し、歴史の客觀性を重んずる點に於いて、彼は又ランケの先驅者なりと云ふべきである。何者ランケの歴史研究の目的も彼の自白せるが如く、「過去を批判し、將來の利益の爲めに時人に敎へんとするにあらず、只如何にありしかを示さんとする」ことに外ならなかつたからである。しかし如何にありしかをあるが儘に示すと云ふことはフンボルトに於ては（ランケに於てもそうであつたが）歴史の表面に止まることを意味するのではない。眞理は知覺せらるるが如き事物の表面に横はるものにあらず、却つてその內部に存する。故に史家も深く歴史の海に沈潛して、その中に活く力を究め、かくて內部より之を現はさねばならぬ。然るに彼によればこの力は理念である。彼は云ふ。「一切の歴史は理念の實現化に過ぎずと」。故に又歴史記述家の任務は「この理念の現實界に實現せんとする努力の表現に存する」。

フンボルトから見れば、歴史の眞は特殊の事實そのものにあるにあらず、却つてその普遍的關係に存するが故に、史家は單に個々の史實の穿鑿に終らず、これを普遍的關係に於いて現はさねばならぬ。しかしこの普遍的關係に重きをおくの餘り、かの神學者や哲學者のなすが如く、「任意に先天的理念を構成

し、これを現實に押附けてはならぬ」。これは彼によれば史家の避くべきことである。彼は親ら歴史の研究に從事した。從つて史家の立場よりして全體の關聯の爲めに史實を犧牲に供することは彼のなし得る所ではなかつた。彼は歴史哲學者として理想を有した。しかし彼は同一の理由よりしてこの理想を提げて歴史に臨むことは出來なかつた。理想は彼にあつては歴史の研究より得らるべきものであつた。全體の關係も亦然りで、そは史實の研究中に史家によつて豫感せらるべきものであつた。この點に於て彼はランケと共に史家に經驗的たるべきことを望んだ。然しながら彼はこの全體の關聯を把握せんが爲めに、直接知覺の領域に止まつて居ることは出來ず、尙それ以外理念の世界に迄も飛躍せねばならなかつた。この點に於て彼はたしかに哲學的であり、形而上學的であつた。しかも彼は歴史の形態を主とし、その表現に重きをおく點に於て彼は又藝術的であつたと云はねばならぬ。かくの如く彼は經驗史的であり、哲學的であり又藝術的であつたと云ふこと、而して之を史家に望んだと云ふことは決して偶然ではない。彼の時代は實に歴史と哲學と藝術との最も接近せる時代であつたからである。